
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 浴衣《ゆかた》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 疲労|困憊《こんぱい》の色が深くて、

おのれの行く末を思い、ぞっとして、いても立っても居られぬ思いの宵は、その本郷のアパートから、ステッキずるずるひきずりながら上野公園まで歩いてみる。九月もなかば過ぎた頃のことである。私の白地の浴衣《ゆかた》も、すでに季節はずれの感があって、夕闇の中にわれながら恐しく白く目立つような気がして、いよいよ悲しく、生きているのがいやになる。不忍《しのばず》の池を拭って吹いて来る風は、なまぬるく、どぶ臭く、池の蓮《はす》も、伸び切ったままで腐り、むざんの醜骸をとどめ、そろそろ通る夕涼みの人も間抜け顔して、疲労|困憊《こんぱい》の色が深くて、世界の終りを思わせた。

上野の駅まで来てしまった。無数の黒色の旅客が、この東洋一とやらの大停車場に、うようよ、蠢動《しゅんどう》していた。すべて廃残の身の上である。私には、そう思われて仕方がない。ここは東北農村の魔の門であると言われている。ここをくぐり、都会へ出て、めっちゃめっちゃに敗れて、再びここをくぐり、虫食われた肉体一つ持って、襤褸《ぼろ》まとってふるさとへ帰る。それにきまっている。私は待合室のベンチに腰をおろして、にやりと笑う。それだから言わないこっちゃ無い。東京へ来ても、だめだと、あれほど忠告したじゃないか。娘も、親爺《おやじ》も、青年も、全く生気を失って、ぼんやりベンチに腰をおろして、鈍く開いた濁った眼で、一たいどこを見ているのか。宙の幻花を追っている。走馬燈のように、色々の顔が、色々の失敗の歴史絵巻が、宙に展開しているのであらう。

私は立って、待合室から逃げる。改札口のほうへ歩く。七時五分着、急行列車がいまプラットホームにはいったばかりのところで、黒色の蟻《あり》が、押し合い、へし合い、あるいはころころげ込むように、改札口めがけて殺到する。手にトランク。バスケットも、ちらほら見える。ああ、信玄袋《しんげんぶくろ》というものもこの世にまだ在った。故郷を追われて来たというのか。

青年たちは、なかなかおしゃれである。そうして例外なく緊張にわくわくしている。可哀想だ。無智だ。親爺と喧嘩《けんか》して飛び出して来たのだろう。ばかめ。

私は、ひとりの青年に目をつけた。映画で覚えたのか煙草《たばこ》の吸いかたが、なかなか気取っている。外国の役者の真似にちがいない。小型のトランク一つさげて、改札口を出ると、屹《き》っと片方の眉をあげて、あたりを見廻す。いよいよ役者の真似である。洋服も、襟《えり》が広くおそろしく派手な格子縞《こうしじま》であって、ズボンは、あくまでも長く、首から下は、すぐズボンの観がある。白麻のハンチング、赤皮の短靴、口をきゅっと引きしめて颯爽《さっそう》と歩き出した。あまりに典雅で、滑稽であった。からかってみたくなった。私は、当時退屈し切っていたのである。

「おい、おい、滝谷君。」トランクの名札に滝谷と書かれて在ったから、そう呼んだ。「ちょっと。」

相手の顔も見ないで、私はぐんぐん先に歩いた。運命的に吸われるように、その青年は、私のあとへ従《つ》いて来た。私は、ひとの心理については多少、自信があったのである。ひとがぼっとしているときには、ただ圧倒的に命令するに限るのである。相手は、意のままである。下手に、自然を装い、理窟《りくつ》を言って相手に理解させ安心させようなどと努力すれば、かえっていけない。

上野の山へのぼった。ゆっくりゆっくり石の段々を、のぼりながら、

「少しは親爺の気持も、いたわってやったほうが、いいと思うぜ。」

「はあ。」青年は、固くなって返辞した。

西郷さんの銅像の下には、誰もいなかった。私は立ちどまり、袂《たもと》から煙草を取り出した。マッチの火で、ちらと青年の顔をのぞくと、青年は、まるで子供のような、あどけない表情で、ぶうっと不満そうにふくれて立っているのである。ふびんに思った。からかうのも、もうこの辺でよそうと思った。

「君は、いくつ？」

「二十三です。」ふるさとの訛《なまり》がある。

「若いなあ。」思わず嘆息を發した。「もういいんだ。帰ってもいいんだ。」ただ、君をおどかして見たのさ、と言おうとして、むらむら、も少し、も少しからかいたいな、という浮気に似たときめきを覚えて、

「お金あるかい？」

もそもそして、「あります。」
「二十円、置いて行け。」私は、可笑《おか》しくてならない。
出したのである。
「帰っても、いいですか？」
ばか、冗談だよ、からかってみたのさ、東京は、こんなにこわいところだから、早く国へ帰って親爺に安心させなさい、と私は大笑いして言うべきところだったかも知れぬが、もともと座興ではじめての仕事ではなかった。私は、アパートの部屋代を支払わなければならぬ。
「ありがとう。君を忘れやしないよ。」
私の自殺は、ひとつきのびた。

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年10月13日公開

2005年10月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。